

論文の概要

◆論文題目

「障害児福祉におけるマリア・モンテッソーリ教育に関する一考察」
(「A Study on Maria Montessori Education in the Welfare of Children with Disabilities」)

◆論文要旨

序章 研究の目的と方法

第1節 研究の背景及び目的

社会福祉学で論文博士を目指す根底には常にモンテッソーリ教育学が存在した。さらに、イタリアの女性博士マリア・モンテッソーリが障害児教育の真理を開拓されたことに敬意の気持ちを持ち続ける経過から障害児に福祉が重要な役割を持つことに気付いた。

現在、日本において児童虐待は過去最多を更新し続け、障害を抱えるこどもの増加と共に特別な支援を必要とするこどもが多く存在する。様々な障害を持つこどもは、障害者福祉の視点から重要な課題として特別な支援が見直されてきている。2006年10月に完全試行された障害者自立支援法(令和3年現在・障害者総合支援法)では、障害を持つ者の地域生活と就労を進め、自立を支援する観点から障害種別で異なる法律に基づき提供されてきた福祉サービス、公共負担医療費等について共通制度のもとで一元的に提供する仕組みに改正された。新しい施設・障害福祉サービス事業体系への以降は2006年から概ね5年間をかけて段階的に進められ、2014年4月には新たな体系に完全移行し、施設実習での対象施設も一元化された。本稿では、マリア・モンテッソーリ学の本質である「こどもへの愛しみ」に視点を当て、障害を抱えるこどもを中心とした子育て支援の取り組みについて研究し、今後わが国における子育て支援・障害児福祉の在り方について探求する。学術的には、モンテッソーリ教育学はこどもの最善の利益を守りながら「こども自ら育つこと」をどのように示唆し、これらの問題に関して教師のあるべき姿や保護者への啓蒙を促しているのだろうか。また、今日新しい教育と福祉の変換が行われ、インクルーシブな保育が叫ばれながらも、わが国で障害を持つ親子が、与えられた学ぶ権利を持ちながら、社会の中で生きづらさを覚え、乗り越えていく困難な壁が多いのはなぜかを論じていきたい。

イタリアの女性博士マリア・モンテッソーリは、教師中心の硬直化した教育に対し、「幼い頃からのこどもを研究から個の発達にふさわしい適切な教育方法を見出す」という教育固有の論理を追求している。女史の「教育固有の論理追求の方法」は他の教育思想家と比べて特異である。新教育運動の代表者とされるデューイは、教育家というよりもプラグマティズムの哲学者であり、ワロンにしても心理学者であった。時代をさかのぼり、ルソーやコメニウスなど思想家や学者は原理的・理論的考察から教育の転換を考察していった。本研究の目的は、マリア・モンテッソーリ教育の精神性・道徳性を重んじ、我が国の社会の中で育つ健やかなこどもの成長と発達を願い、こどもの誕生を周囲の大人が大切と捉える福祉観を樹立していくことにある。また、母親が働きやすい社会を作るために、障害児福祉がどのようにあるべきかを明らかにする必要性がある。

持続可能な社会 ESD(Education for Sustainable Development)の実現のためには、全ての人暮らし方や社会の仕組みを持続可能なものに換えていく必要がある。

これらの思想はキャリア教育、障害者支援教育とも重なるところが多く、今日の教育課題に迫る上で重要な課題を持つものである。

さらに、こどもの最善の利益を担う我が国の将来像としては、少子化・グローバル化が進む世界で社会福祉観を共有することが望まれる。

1. 本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」

(1) 本研究の学術的背景に至る経過と研究の学術的な背景

「子育て支援」を支える社会福祉とは何か。少子高齢化社会を背景にした新しい子育て、子育ての文化は、時代の流れとともに次第に国民の間に浸透しつつある。子育てをめぐる、価値観の揺らぎもあり、こどもはもちろんのこと、親自身も親育ちの難題を抱え苦しんでいる現実にある。

平成 20 年～10 年の間、従兄の在住するスペイン、イタリア、フランスに出かけ、保育・子育て支援の省察を行った。そして、両国で見た絵本や教具・教材を日本の国の託児、育児支援に取り入れた。両国の教具・教材は色彩が美しく、こどもたちの感性を引き出すものであり、絵本は知的に優れ、親の教育観を高めるものであった。追及する幼児教育とモンテッソーリ教育の研究から見え隠れするものは多く得られた。しかし、その後 4 年間を経過した研究では保育が育てる精神部分やこどもたちの内面的、潜在的な力を育てる上で困難を感じた。「子育て支援」を支えていかなければならない教育、保育とは何かを具体化していく必要性が生じたからである。大人にとっての「仕事」とは、日常生活をするための資金(報酬)を得るための行為であり、ほとんどが契約により結ばれている。また、社会的な貢献に結ばれる「仕事」であれば、何らかの結果を出すことを目的とする。しかし、こどもの「仕事」は、自身の身体を創ることを意味する。こどもの身体を創るプロセスは、こども自身が誕生と共に内面に持って生まれてきている。こどもは誕生の直後から内的衝動に従い自己形成を行う。無知・欠落から脱し、心理的逸脱と無学から解放されなければならない。こどもは誕生したその瞬間から与えられた環境に適応し生きるため、潜在的に備える内的教師 (Inner Teacher) に導かれ、自らの力で身体を創り始める。しかし、こどもに全てを委ねることはできない。そこには必ず社会的ルールや規範意識、そして未発達なこどもを善く育てる社会と外的教師の存在が必要となる。こどもの成長のスケジュールには思う存分に活動が出来ることと同時に、教育を受ける一人の人間として育つ経過中の「気づきの芽」が重要なものとなる。モンテッソーリは医学博士でこそあったが、「実践と観察」を重んじ、目の前のこどもと向きあう中から理論を形成した。博士が「こどもは私の教師であった」と述べるように、その理論は目の前のこどもから与えられる「啓示」によって形成されていったかに思われる。日本の国では、今日新しい教育の変換が行われ、インクルーシブな保育が叫ばれている。しかし、わが国で障害を持つ親子が、生きる上で学ぶ権利を持ちながら、乗り越えていく困難な壁が多いのはなぜだろう。こどもは、種としての人間の持つ器官的装備は貧弱であり、苛酷な自然環境の中で生存すらままならない。障害があるこども、無力なこどもは、他の動物のような確固とした生得的行動様式も持ちあわせないひ弱な存在である。しかし、言い換えれば、種や芽としてひ弱で、確固とした生得的行動様式を持ちあわせていないということは、同時に

人間の可塑性、動物にはみられない創造能力が保障されるということではないのだろうか。

・保育の変換により育てようとしていることは何か

いま、こどもが生きる世界中でコロナ感染症の拡大も含む経済、貧困、障害、虐待、子育て等、支援を求める様々な問題が起こり、人間は困難な世紀に存在している。日本の国では、障害児福祉と人間の根源である人格の実現は何よりも教育から遂行しなければならない。今日、人間は、人間の築きあげた外的世界に対して無力である。人間は外的世界の犠牲になるのではなく、人間の内的価値を高める手段を構築することが望ましい。それは、人間の希望が託されている革命を起こすことである。こどもが人間を作り、「正常化した大人」を作ることによってしか為しとげられない革命には、こどもの「創造的使命」がある。マリア・モンテッソーリの言うように、“大人がこどもを作るのではなく、こども自ら自分を創り出す”そのために、障害児福祉の追求と共にモンテッソーリ教育学からこどもが生命の法則に従い自分で人格を実現することに気づくことが必要である。本研究では、このことを踏まえながら、モンテッソーリ教育学の「お仕事」を追求している。幼い頃から善い芽と同時に芽生えようとする差別や偏見を失くし、道徳心と規範意識を教育から育成すること。更に、種を大切とし成長するべき障害を持つこどもの役に立つ9つの教育プログラムを作成するべく、各々の専門分野領域を持つ教師の挑戦的研究法がどのプログラムに生かされるかを見極め、研究開発に努める。加えて、幼いこどもから正しく援助するのが大人の義務、社会の義務であること、発達の遅れのあるこどもも平等に受け入れ、同じようにそだてることを教育の遂行から再認識することに到達したい。

①著書:中北龍太郎・後藤貞人他4名共著『支援のための制度と法の在り方とはーバックアップ社会へ』(2016)「花園大学人権教育センター」,②研究論文:『我が国における医療保育の必要性』(2016)「花園大学人権教育研究誌第24号」③著書:『マリア・モンテッソーリ「0歳からの教育の尊さ-響き合う保育と医療-」』(2021)「学苑社」④研究論文『危機に対応する子育て支援室での保育士の業務についてーこどもの命と最善の利益を守る意識調査から』(2021)「総合人間科学研究学会総合人間科学Voi.7」⑤『モンテッソーリ教育とコスミック理論』(2021)「滋賀短期大学研究紀要第46号」⑥『モンテッソーリ教育学と幼児教育の追求』(2022)「花園大学社会福祉学部研究紀要第22号(2013) 幼児教育の追及とモンテッソーリ教育再校」①では、障害を持つこどもが保育を受ける「0歳からのエデュケア」について考察した。知力は花に例えられる。花の根の部分か知力の基盤であるが、この基盤となる土壌は、乳幼児の遊びと生活を通して耕されている。豊かな土壌の上に、知力の芽が出、成長し、やがて何枚もの花びらを持った美しい花が咲く。花の成長のスピードや開花は一樣ではないが、乳幼児の発達に沿って時間差を伴い、開いていくものと捉えた。ある子は、運動遊びは得意だが言葉はゆっくりしているとか、ある子は、指先は器用だが友達とうまく遊べないなど、個人差により得意不得意がある。新しい教育において保育士は、一人ひとりの花に寄り添った関わり方をすることが求められる。②において、治療は、人間の「人格形成」にどのように繋がるものであるか。それは保育にどのように繋がっているものか。論じている。個の障害は生活や学習における大きな負荷要因となる。障害児に対するモンテッソーリ教育法は治療科学的であり、治療的機能は実践の構成要素を形成し、実践自体は福祉的な点に特色がある。③では、イタリアの医学博士マリア・モ

ンテッソーリ（1870 -1952）の0歳からの教育を多角的視点から社会福祉を中心に置き、社会的な問題を取り上げながら世界中のこどもの平和と愛を願うモンテッソーリ思想を実践と共に論文にまとめた。モンテッソーリが健康なこどもにも障害を持つこどもにも変わらぬ深い愛を注ぎ、哲学的・心理学的な理論を実践のきめ細かい解説と結びつけている点を0歳からの教育の尊さと捉え、障害児福祉の必然であると重んじた。④モンテッソーリ教育における治療の考え方に関連し、こどもの命を守るための最善を考慮した災害時の意識調査を取り上げた。子育て支援に関わる保育士は突然の災害や発熱したこどもに対して、それらの危機に際し専門性を生かした適切な対応と業務遂行の使命を持っている。業務についての意識は、社会的意識と保育士の人格にも関わる重要なものだと捉えた。⑤マリア・モンテッソーリのコスミックに関する理論の基本的テーゼは、宇宙全体に統一性が存在するというものである。宇宙は、偶然的な存在でなく、ある一定の秩序が保たれた合理的理性により造られた。モンテッソーリ教育のコスミック理論には宇宙の創設者としての神が存在する。更に、神聖なる宇宙には調和があるとモンテッソーリは語っている。宇宙では生物と無生物の両方が支え合っている。さらに、マリア・モンテッソーリはローマにおいて、モンテッソーリ教育を進化させるには、乳幼児から先天性可能性を発達させなければならないことを述べた。モンテッソーリにおけるコスミック理論はモンテッソーリ教育の内側で人間の形成を可能にすると考えた。⑥平成29年改訂翌年から実施された幼稚園教育要領と社会福祉の捉え方の変換に基づき、文部科学省は家庭や地域社会の生活の変化から、こどもの自立と自主性の指導を改善内容のひとつとして挙げている。21世紀に入り、再びモンテッソーリ教育学が注目されるようになったことを踏まえ、本論では、モンテッソーリ教育との接点と幼児教育について指摘した。

(2)本研究の目的および学術的独自性と創造性

文部科学省から「生きる力」や「心の教育」が叫ばれ、保育・教育要領の改訂が幾度も行われてきた。日本では十数年の間に大震災等も起こり、人々の心の平和が失われており、親子関係においてさえ徐々に生命の尊さが軽視されている。人間に本性的な価値志向の秩序感が失われている。社会的な多様性はそれなりに進歩しているが、その基礎には文化的存在である人間の生き方に秩序感がなければならないはずである。研究では、障害児福祉の重要性を問いかけつつ、こども自身に何を育てたいか、独自性を重んじながら、学術的に追及していった。⑦研究論文：「モンテッソーリ教育におけるこども世界の考察」（2014）『目白大学「総合人間科学研究」VoI.2』育児の遊び場と支援にかかわる保育者の保育観と遊びの工程に着目し「こどもにとっての自己を育てる世界とは」を事例のなかから分析していった。⑧学術論文：「絵画・造形から生まれる協同性の研究—教育美術論とこどもの精神を基礎にして—」（2015）『大学美術教育学会学会誌「美術教育学研究第48号」』誕生と共に始まるこどもの人としての人格の形成とその偉大さを述べながら、社会福祉にも関わる「協同性」の深い意味を持ち育つことを明らかにしている。本稿では、「美術教育論」にハーバード・リード(1893-1968)を取り上げた。社会の変化により、家庭や家族の在り方が問われる現代「求められる協同性とこどもの創造力をどのように育てていくか」を子育てシステムに提案している。⑨学術論文：「太宰治における神話『お伽草紙』の探求」（平成元年）『幼年教育WEBジャーナル第2号』物語は人の心を開き、人の柵を開くものである。このことから、内発的動機(自己開発性)は、顕在化されていく。応答する社会と環境こそ、人間自身を

支えるものであり、それら具体的機能が物語を神話に準ずる人々の心の柵を開く要素になっていると考察した。⑩研究論文：「乳児の最善の利益を考慮する専門職の視点－インクルーシブ保育に着目して－」『姫路獨協大学教職課程研究室教職課程研究第31集』教師は専門職としてこどもを認め、一人ひとりのこどもの違いを大切にし、理解しながら個々の人間としての育ちを見守っていくことが改めて重要である。モンテッソーリ教育と同一の考え方であるインクルーシブ保育では、「こどもの違い」を排除することなく受け入れ、共に育つ環境を提供している。急激な女性の社会進出と出生率の減少のなか、改めて専門職の視点に立ち、乳児の最善の利益の重要性について述べた。インクルーシブ (inclusive) には「包括的な」「すべてを含んだ」といった意味があり、いま求められる教育に共通する福祉の考えを示している。本稿では、前述を踏まえ、0歳からのこどもの最善の利益を守る温かな社会の一員としての大人の尊い視点を明らかにしようとした。

(3) これまでの研究活動を踏まえ、この研究構想に至った背景と経緯

ユネスコの取り組みにおいては、2019年～現在に渡り多様な文化を基礎的概念として位置づけ、その上で、教育・環境・地域社会において取り組むべきことが強調されている。また、公平な意欲的インタラクティブな教育システムを可能とし、それにより基礎的要素である文化要素の多様性を尊重し、品位を持ち持続可能な社会づくりを支える人材を可能とするような仕組みの構築が喫緊の課題であり、共生の価値観が機動力を発揮することが期待されている。神から与えられた知性と人間が作り上げた文化をマリア・モンテッソーリは「超自然＝文明(civilization)」と名付けている。しかし、知性そのものを与えられた人間は現在も「超自然」の環境を整えられずにいる。

加えて、保育者の役割には、母親的な役割、こどもの生活並びに発達援助、環境構成、心理的サポート、障害や困難の克服あるいは意欲の向上などがある。同時に、養護の導入効果としては不安、抑鬱等の軽減や緩和、遊びによるフラストレーションの解消、生活指導などが認められており、養護の役割は非常に重要と捉えた。日本の将来像としてはグローバル化が進む世界で支援の存在感を保つことを願う。

日本の5領域と異なり、イタリアでは、国が示す乳幼児教育の5領域（自己と他者・身体と運動・言語能力、創造性、表現力・会話とことば・世界を知る）を基本に、こどもの関心や知識への欲求、探索や学習への動機づけを大切にしている。対し、社会福祉の実現と並行し、我が国では「教育要領、保育指針の改訂」や「親育ち」の必要性から具体的な「支援室の在り方」が問われる。

本稿ではこのように幾つかの先行研究から、こどもの発達、障害児福祉と共にこどもの成長を育てる環境の支援を本研究に提示しようとした。

(4) 学術の現状を踏まえ、本研究構想が挑戦的研究としてどのような意義を有するか

本研究の意義においては、創造能力は、ある意味、人間にとって非認知な潜在可能性を持つものであり、適切な時期に適切な環境や教師の働きかけがなければ芽生えないものと捉える。日本の保育現場では、保育の質の向上や事故防止(安全)をめぐる、情報開示、教育の標準化、保育の評価、危機管理などが議論されてきた。そして、これらの議論では、限られた担当者や専門家が仲立ちとなり日本とはまったくシステムの異なる海外の保育学経済学からの発想で、やはりシステムやコンテキストの違う諸外国で生まれた解決策

の諸手法（保育技術評価、クリティカル・パス、臨床ガイドライン、病児のこどもに対しては、疾病管理、EBM－根拠に基づく医療、NBM－語りに基づく医療）を模倣し、現場に無原則に導入しようとする。イタリアではさらにこどもに対する家族支援にも補助が進んでいる。

しかし、日本の子育て現場を規定している実際の具体的な外部的枠組み、内部的諸制度の実際は、アクター間の独自の力関係を真剣に分析・考慮せず、またその配備の変更、関係の組み替えを実践する運動を創らない限り問題解決に結びつくことは決してあり得ない。

本研究では、子育て支援室での観察を主に研究開拓していくことを考えた。先行研究からは、こどもへの保育者のオラリティ（声掛け）が重要なことが明らかとなった。非言語な保育者の立ち位置や振舞、距離も言語と同じように信頼に変わり乳幼児（障がい児）の心を動かす。さらに、研究の意義では、乳幼児（障がい児）の発達の違いや個人差を捉え、共生の立場に立てる見守りの実践を行うことを大切にする。貢献の予測としては、こどもを救う周囲の人々の共生と癒しの効果による研究成果により、将来の福祉士・保育士の歩みに貢献できるのではないか。

第2節 研究の方法と内容

研究方法としては、本稿の核の部分に「障害児福祉・保護者支援」という独創性を入れる。また、先行研究より、保育者のオラリティ（声掛け）が乳幼児にとっていかに大切であることを踏まえ、次の開拓ステップとして、日本とイタリアの比較（乳幼児教育とモンテッソーリ教育学）から、保育者が乳幼児に寄り添う場面を観察していくことを考えた。

質的研究を主に下記のような**《研究デザイン》**を方法として挙げる。

- ・社会福祉研究「社会と障害児福祉:研究ステップ1」
- ・モンテッソーリ教育学「障害を持つ子と親支援:研究ステップ2」
- ・文献研究「研究ステップ3」

具体的内容としては、

1. 観察では、大人と乳幼児（障がい児）の距離感と身体の向き・声掛けを対象に事例を拾い上げていき、共存・共生の経過を導く。
2. 乳幼児（障がい児）と相互の共生が行われるための生活となる場の構成調査を行う。
3. 文献による歴史的背景から我が国の障害児福祉に求められる教育価値を探求する。
4. 母親と乳幼児（障がい児）の親子関係や子育て支援の重要性に関しての問題を追及し、困難を抱える母子を救う施策の考察を行う。
5. 上記から得た結果を論文にし、学会のシンポジウム・口頭発表・ポスター発表だけでなく、モンテッソーリ学会での口頭発表、保育学会における学術集会等で公表する。未来に向かい、乳幼児（障がい児）に寄り添う社会福祉の持ち得るべき使命を確認する。
6. 障害を抱えるこどもの成長を考慮した障害児福祉を基礎にした支援を文献により海外と比較しながら我が国の社会福祉に位置付けていく。

第3節 本稿の意義

マリア・モンテッソーリの愛について述べる時、その愛は福祉の観点に立ち返り子どもを救う保育者の教育思想と実践に生きている。この理論を大切に、本稿では障害児福祉による教育の尊さを研究の柱に挙げた。

マリア・モンテッソーリは障害を持つ子どもに深い愛情を注いだ。発達に躓きのある子どもが意欲を持ち、壁を乗り越えようとする時、保育者と子どもの信頼感が何よりも子どもの心を動かしていく。筆者は、保育者として教育に携わって来た経験から、子どもの発達の違いや個人差を捉え子どもの立場に立てる保育実践を行うことに社会福祉の貢献として大きな意味があると考えた。

子育て支援の一場面では、相談に見えた母親が子の障害を先天的であるか否かに神経質になられ、後天的な障害であると主張される母親の姿を受け入れる時、母親の気持ちがわかるように努めている。本稿が我が国の障害児福祉の一助になればと、モンテッソーリ教育学の中に息づく福祉観を媒介にした。

第1章では、「障害児福祉への視座—マリア・モンテッソーリ教育学を中心として」をタイトルに挙げ、生命の喜びを共感し合う社会福祉とモンテッソーリ教育学を論じた。モンテッソーリ教育学が日本の国で重んじられるようになった経過を時代の背景から伝授し、障害児福祉が日本の国に求められる意義に結んでいる。社会福祉活動子育て支援を軸にした研究と共に喜び合う0歳からの成長の援助から障害児福祉を探求している。次に、社会福祉の必然性とモンテッソーリ教育学の追求を取り上げ、歴史的な障害児教育とモンテッソーリ教育学の関連性を述べた。モンテッソーリ教育学と社会概念・コスミック理論からは、子育て支援室での実践を取り上げながら、子どもの自己形成と新しい福祉社会への発展が望まれることを伝授した。また、0歳からの心を育む絵本研究として、母親との絵本体験から子どもに感性育成をねらうことを伝えている。創作絵本と子どもの喜びからは、愛情深い絵本の出会いと読み聞かせの実践を取り上げた。

第2章では、マリア・モンテッソーリについて多くの文献からその生涯と愛を論じた。一人ひとりの子どもが障害児福祉を受け、モンテッソーリが子どものこころの発見者であることを重んじ、健やかに自主的に良い環境の中で育つための社会福祉観と科学的教育について示している。さらに、子どもの最善の利益として、子どもの違いを考慮するインクルーシブな考えや障害の捉え方について論じた。モンテッソーリ教育学が障害児福祉を取り込む必然性について語っている。

第3章では、日本の社会と子どもの精神に潜在する協同性について論じた。新しく改定された幼稚園教育要領・保育所保育指針等と照らし合わせ、社会福祉が今後我が国で益々求められることと合わせて、子どもの精神に潜んでいる協同性や可能性を追及した。目的の生成における子どもの主導権と福祉的援助や刻印づけ(imprinting)の概念についても探求している。また、障害児福祉を重視したモンテッソーリ教育学における童歌の中からは、子どもの潜在的可能性を引き出す障害児福祉について語り継いだ。

第4章では、モンテッソーリ教育における治療教育を考察し、障害児福祉の必然性を取り上げている。モンテッソーリ教育法と社会的ケアに関しては、障害児に関するこころの治療

が持つ意味、障害児に関するこころの治療の研究等、取り上げた。人格形成に関わる乳幼児期の生活から自律心を養う循環の仕組みを示した。同時に、生命とこどもの最善の利益を守る子育て支援における保育者意識の章では心の傷とケアについて問いかけた。

第4節 本稿の構成内容

序章

第1章：障害児福祉への視座—マリア・モンテッソーリ教育学を中心として

第1節…生命の喜びを共感し合う社会福祉とモンテッソーリ教育学

- 1 社会福祉活動子育て支援を軸にした研究 / 2 共に喜び合う援助と0歳からの成長

第2節…社会福祉の必然性とモンテッソーリ教育学の追求

- 1 歴史的な障害児教育とモンテッソーリ教育学の関連性 /

新教育運動と社会における思想的源泉 / 新教育運動の発足と社会福祉 / ルネサンス以降の教育思想と近代国民教育制度による社会福祉 / 社会的効率と福祉・経済への発展 / 社会的新教育運動の展開とモンテッソーリ教育学の転換 / 社会的新教育運動の展開 / マリア・モンテッソーリによる社会の転換 / 社会福祉実践家としてのマリア・モンテッソーリ / 子どもの発見 / マリア・モンテッソーリの福祉観 / マリア・モンテッソーリの障害児支援 / 遊びが子どもの仕事 / 社会福祉の実現を目指して

第3節…モンテッソーリ教育学と社会概念・コスミック理論

- 1 コスミック理論における社会的価値と生命 / コスミック教育とは何か / 宇宙における人間の位置付け / 2 ファンタジーとコスミック教育 / 3 コスミック教育のささやかなる障害児支援と実践 / こどもの体験「聖書のおはなし」から / こどもの体験「暗闇から光が発せられる」 / 4 0歳からの社会的成長と自己形成 / 5 新しい社会価値と教育への発展

第4節…障害児福祉に着目した0歳からの心を育む絵本研究

- 1 母親との絵本体験から / 2 絵本がこどもに育てる福祉

第5節…創作絵本と福祉実践「絵本読み聞かせ」

- 1 愛情深い絵本の出会いと読み聞かせの実践 / 2 乳幼児期から育てたい福祉教育による感性育成

第2章：こどものこころの発見者であるマリア・モンテッソーリ

第1節…マリア・モンテッソーリとその生涯

- 1 マリア・モンテッソーリと障害を抱えるこどもの理解 / 2 マリア・モンテッソーリの文献 / 3 マリア・モンテッソーリの社会的理論 / 4 自由概念と障害児への理論

第2節…モンテッソーリ教育学と新しいこども

- 1 こどもを真に育てる法則 / 2 現代社会の変動と親子関係

第3節…乳児の最善の利益を考慮する専門職の視点

- 1 インクルーシブ保育の着目 / 2 インクルーシブ保育の価値 / 3 乳児の最善の利益の探求 / 4 乳児の最善の利益を考察する事例から

第4節…保育士資質をいかに育てるか—発達観と美意識の原点に立ち返って—

- 1 発達観と福祉観 / 2 保育士資質の考え方 / 3 保育士資質に潜在する福祉観と美意識 / 4 個人差に応じる保育士

第3章：日本の社会とこどもの精神に潜在する協同性

第1節…こどもの精神と潜在的可能性

- 1 モノ造りの基礎となるこどもの精神 / 2 社会的背景と協同性の捉え

第2節…こどもの独自の感受性と創出

- 1 目的の生成におけるこどもの主導権と福祉的援助 / 2 刻印づけ (imprinting) の概念

第3節…障害児福祉を重視したモンテッソーリ教育学における童歌

- 1 こどもの潜在的可能性を引き出す障害児福祉 / 2 0歳からの音への愛着 / 3 0歳からの音の誕生 / 4 童歌の基礎と社会への響き合い

第4節…絵画における体験とイメージを通してモンテッソーリ・メソッドを巡る表しの考察

- 1 メソッドの調査対象及び内容 / 2 生活における豊かな自然との出会い / 3 モンテッソーリ・メソッドと障害児福祉

第5節…モンテッソーリ・メソッド(the method of Montessori)におけるこどもの環境

- 1 こどもの心象とメソッド
- 2 アトリエにおける子育て支援
 - (1) 福祉調査「表現とモンテッソーリ・メソッド」
 - (2) 地域のなかで育つこども

第4章：モンテッソーリ教育における治療教育に関する一考察

第1節…モンテッソーリ教育法と社会的ケア

- 1 我が国での小児医療 / 2 治療教育とモンテッソーリ教育 / 3 障害児に関するところの治療が持つ意味 / 4 障害児に関するところの治療の研究

第2節…人格形成における省察（マリア・モンテッソーリ）」

- 1 社会を生きるこどもの人格形成 / 2 個人差と人格の形成

第3節…生命とこどもの最善の利益を守る子育て支援における保育者意識

- 1 心の傷と心のケア / 2 調査結果を踏まえた危機対策の考察

終章

おわりに

謝辞

第5節 研究の倫理(人権の保護及び法令等の遵守への対応)

個人情報を伴うアンケート調査・インタビュー調査、ヒト遺伝子解析研究、遺伝子組換え実験、動物実験などは非対称であり、対象となるものは、行動観察・提供を受けた資料の使用のみである。

(生命倫理委員会承認を原則とする)

研究に際しては、勤務先大学及び短期大学の「生命倫理委員会」に「倫理審査申請書提出」の上、承認を得ている。

(個人情報保護の方法)

個人の情報は大学及び短期大学にて保管する。事例等は、インターネットに繋がっていない外部記憶装置などに保存し、鍵のかかる研究室にて、厳重に保管する。

上記データ（観察における調査結果）は、匿名化し、正確且つ検証可能なように記録され、保管については、ネットに繋がっていない外部記憶装置などで個人情報をID化しデータ処理を行う。紙のデータは、鍵のかかる研究者研究室にて厳重に保管庫で管理する。

第6節 考察と今後の課題

マリア・モンテッソーリが障害を持つ子どもや病児の子どもに注いだ愛情は深い愛情に満ちており、敬意の気持ちを抱くものである。本稿では、マリア・モンテッソーリが子どもの最善の利益を願うことを重要視し、モンテッソーリ教育学が障害者福祉と繋がっていることを告げている。福祉における治療とは何か。モンテッソーリ教育学における治療的教育実践を通し、それら障害の改善又は軽減を図ることは障害児福祉の課題である。治療とは、病気が治ることと一言で言いきれない症状があり、治癒しながら歩んでいくこと、それは、障害や病気と言い切るのではなく、徐々に育つ歩みとも考えられる。見守りを大切にするモンテッソーリ教育学の考え方は障害児福祉と社会の治療と言えるものである。しかし、周囲が子の症状に対して、「遅れている」と捉えずに、個性と捉える場合、個性と受け入れられない親と子の苦しみを少しでも軽減し、救うことが社会福祉の役割である。

従来、大人は、子どもをよりよく知っている存在であり、子どもに教えを注ぎ、子どもを育てるための導きをするものであるという認識が常識と思われがちである。しかし、マリア・モンテッソーリは、“子どもこそが中心である。我々大人は子どもに仕えるべきである”と結論付けた。そして、教師が導く教育の対象となる子どもは、どのような人間として養うべきかを問いかけている。

長い歴史のなかから思考すれば、人間は哺乳類に属することから始まる。哺乳類として母が子を産み落とす。社会の営みがなければ人間が人間として成立しない。また、我々は、人間形成は生命の誕生と共に始まるということを理解していくことが、生物学の理論に基づき人間の理解に結ばれていく。つまり、人間は生まれてきた乳児が生きる過程において一人ひとりの違いを知り、差別なく障害や困難を受け止めながら、人生の終わりまで発達のなかで進化の歴史を繰り返していく。母の胎内で芽生え育っていく種は胎児として密やかな成長を遂げ、外界に生まれた後にも乳児として母と長い乳幼児期を過ごしていく。人間により作られる環境のなかで既に一人の人間としての形成は乳幼児から母と共に始まっている。

さらに、大人は、乳幼児を可愛がり慈しむだけでなく、広いコスミック(宇宙)にも至る夢や創造の育成を担う思考の原点におきながら丸ごとの子どもを個々に必要な福祉観から受容することが重要であることをモンテッソーリは語り継いでいる。

発達の遅れた子どもを温かく見守り、育てたマリア・モンテッソーリの生きた証である知的障害児教育は世界的に賛賞された。幼い頃から善い芽と同時に芽生えようとする差別や偏見を失くし、道徳心と規範意識を教育から育成すること、また、種を大切とし成長すべき障害を持つ子どもの役に立つ教育計画を作成するべく、各々の専門分野領域を持つ教師の挑戦的研究法がどのように生かされるかを見極め、研究開発に努める。

加えて、幼い子どもから正しく援助するのが大人の義務、社会の義務であることを障害児福祉とモンテッソーリ教育学の遂行から再認識することに到達したい。